



クリスマスに絵本を

ミシュカ

文 マリー・コルモン／絵 フョードル・ロジヤン
コフスキー／訳 みつじまちこ ◆ A5変・定価 1430円

貧しい病気の男の子のために自分をクリスマス・プレゼントにささげた、ぬいぐるみのクマのお話。
原書は戦時下の1941年、フランスの有名な「パール・カストール叢書」から出された古典的名作です。



たどりつくまで

ロバと三人の旅

文 アン・ブース／絵 サム・アッシャー／
訳 真下弥生 ◆ A5変・定価 1650円

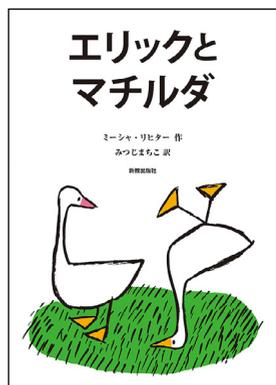
危険な権力者に追われ、安住の地を求めて旅するロバと親子三人。聖書が記す聖家族の《エジプト逃避》を現代の難民に重ね合わせながら、不安に満ちた、しかし人の温もりに支えられた旅路を描くユニークなクリスマス絵本です。

エリックとマチルダ

作 ミーシャ・リヒター／訳 みつじまちこ

◆ A5変・定価 1980円

思いを伝える方法って何だろう？ エリックはマチルダに一目ぼれ。なんとか彼女の気を引こうとしますが……。落ち込んで悩むエリックに、森の賢者のフクロウが与えたアドバイスとは？ 〈伝える〉ことをめぐる、シンプルだけどたいせつなこと。作者はウクライナ出身の漫画家。



● 7 月 刊 行

カール・バルト 《教会教義学》の世界

寺園喜基著

◆四六判・定価 3080 円

邦訳で 36 巻に及ぶ膨大な内容を、一般読者のために的確に要約・解説した貴重な道案内。バルト神学のみならず神学一般への格好の入門書ともなっている。



● 5 月 刊 行

日本におけるキリスト教 フェミニスト運動史 1970 年から 2022 年まで

富坂キリスト教センター編

◆ A5 判・定価 2750 円

詳細な年表と解説、コラム記事で展望する。また同時代を生きた 4 人の女性の証言、インタビューを、さらに 6 つの重要テーマに関する論考を付す。



● 5 月 刊 行

神と上帝

聖書訳語論争への新たなアプローチ

金香花著

◆ A5 判・定価 4400 円

キリスト教の神を「神」と訳すか「上帝」と訳すか。19 世紀中国でついに決着がつかなかった訳語論争の本質を、その後の朝鮮語と日本語における聖書翻訳と比較しつつ、信仰の伝達と意味の翻訳の両面を手掛かりに考察する。



● 5 月 刊 行

ユダヤ人も異邦人もなく

パウロ研究の新潮流

山口希生著

◆四六判・定価 2475 円

信仰義認論を最重視する従来のパウロ理解に異議を申し立て、新約学界で激しい論議を呼んでいる「パウロへの新しい視点」(NPP)。その起源から最新の議論までをカバーした本邦初の本格解説書。



宮平望著

旧約聖書 預言書

要約と概説

好評の「要約と概説」シリーズ最終巻。全預言書の内容を簡潔に要約しポイントを示す。聖書通読と学習の伴侶に最適。 四六判・予価2400円

クリス・グリノフ著／薄井良子訳

クイア神学入門

〔仮題〕

レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー等々、ジェンダーやセクシエアリティの点で非規範的であることを表す「クイア」。それをめぐる多様な神学的冒険を解説した日本語で初の人門書。 四六判・予価2900円

マシュー・ホケノス著／穂田信子訳

マルティン・ニーメラー ヒトラーに逆らった牧師

〔仮題〕

アメリカ人教会史家が冷静な筆致で著した最新の評伝。第一次大戦ではUボートの艦長として戦い、牧師に転身した後もなおナチヨナリストで、当初はナチに共鳴したが、やがて批判に転じ、戦時下は強制収容所に囚われ、戦後はエキスマニカルな場で活躍した激動の生涯。 四六判・予価3500円

内田樹著

レヴィナスの時間論

2刷

四六判・定価2860円

袴田巖著／袴田巖さんを救う会編

主よ、いつまでですか

6刷

無実の死刑囚・袴田巖獄中書簡

四六判・定価1676円

トム・ハーバー作、中村吉基訳、望月麻生絵

いのちの水

3刷

B6判・定価1650円

● 10月に出た本と雑誌など

不安という相棒



フリッツ・リーマン〔著〕・赤坂桃子〔訳〕 不安に対処し、良い人生を生きるために。不安を四つのタイプに分類し、より良き対処法を豊富な例証と共に記述。 四六判・定価2970円

イザヤ書註解 I 1章―10章



ジャン・カルヴァン〔著〕・堀江知己〔訳〕 カルヴァンの初めての旧約註解（1551年）。ヘブライ語の深い知識に基づいて、預言書を読み解く。全5巻。 四六判・定価6820円

教会書簡



現代新約注解全書

辻学〔著〕 教会書簡と総称される文書群は、初代教会の実像を映すパウロの名を借りた偽名書簡。その世界最高水準の注解書。

◆A5判・定価9900円

福音と世界

◆定価660円

11月号 東アジアにおけるキリスト教の可能性

寄稿者：藤本憲正、渡部和隆、朴銀瑛、神山美奈子、徐亦猛、藤原佐和子／連載 今高義也、後藤里菜、山口陽一ほか

●先日、久しぶりに映画館に行きました。白石晃士監督の『コワすぎ 戦慄怪奇ワールド』を観るためです。白石監督といえば、フェイクドキュメンタリーの手法を駆使したホラー作品で知られ、『コワすぎ』はその代名詞ともいべきシリーズ作品です。もちろん全作予習済みのわたしは、同シリーズの主人公工藤仁が今回どんな暴力を行使するのか——霊に取り憑かれた人を正気に戻すのに、「実験だよ実験！」と言い放ってタコ殴りにするような——楽しみにしていました。ところが、シリーズ最終作と銘打たれた今回の『コワすぎ』は、そういった期待を良い意味で裏切る傑作だったのです。ネタバレは伏せますが、これまでは工藤の暴力性がいささか露悪的に描かれてきたところ、今回はそれをまっすぐ自己批判するような作りになっています。『コワすぎ』のキーフレーズが「運命に抗え」だったことを思うと、暴力を内面化してしまうことは運命でもなんでもない、という主張が伝わってくるようでした。なお、このような露悪的な路線からの方向転換は、近年の他作品にも共通した傾向のように思います。要するにホラー映画は進化を続けているわけですが、では、キリスト教はどうでしょうか。ホラー映

画では古色蒼然として体制的なキリスト教会の姿が描かれることも少なくありませんが、そうした描写がなおも有するリアリティは、現実のキリスト教についても何ごとかを物語っているのではないのでしょうか。(堀)

●キリスト教を知りたいと言うある業者の方から「クリスチャンは聖書を信じているのですか」と直截な質問を受けました。少し困って「どういう意味で信じてかにもよりますね」と煮え切らない回答をし、以来あれこれ考えています。今のところ私にとって聖書とは、一言一句を解釈する際の基礎的な参照テキストというのが一番しっくりきます。その中心は「私たちがすべてを愛する神」だと思っていますが、私がこの観念を聖書から(のみ)読み取ったのか、聖書外から持ち込んだのか、実は判然としません。プロテスタントとしていちおう前者が建前でしょうが、教会を中心に営々と聖書解釈を語り続けてきた信仰共同体の無数の声が無関係なはずはありません。ということ、はまた、一信徒にすぎない私といえども、聖書からどんな意味と実践を引き出すかは、長い聖書解釈史の先端で小さな責任を負っていることになります。(小林)

福音と世界

2023年
12

A5判・80頁・定価660円・送料70円
年間予約購読料(送料共)8760円

特集・アーナーキーな共同体

普遍的な共同体——初期キリスト教共同体の

「ミニムム」——ロマン・A・モンテロ

石が叫ぶ

——釜ヶ崎、パレスチナ、暴動の霊性——有住航

Fuck The Police

——フッドとハッスルの霊性——山下壮起

クイア神学における共同性——工藤万里江

描けないシモーヌ・ヴアユ——矢野静明

『対談』織り込んでいく／巻き込まれる。

——「ミニムム」学生寮、生活の対話録

【好評連載】

◆八木重吉の聖書 6 …………… 今高義也

◆神と「女性的なるもの」を辿って 7 ……後藤里菜

◆グレート小林と3人の女 8 …………… 飯田華子

◆私は告白する、私の神を 9 …………… 長尾優

◆地域から考える在日朝鮮人史と教会史 9 ……金耿昊

◆教会におけるイコノグラフィ 20 ……サンダース、ヤバー

◆「日本のキリスト教」を読む 23 …………… 山口陽一

◆新約釈義 ルカ福音書 24 …………… 山崎ランサム和彦

◆古代イスラエル文学史序説 34 …………… 勝村弘也